

上京

史蹟と文化

1992 VOL. 2

美を創る

上京の史蹟②

聚楽第東堀跡から金箔瓦ぞくぞく

文化に学ぶ上京の再発見

思い出の西陣映画館①

町内よもやまばなし

これはどこでしょう？



美を創る

人形作家

林 駒夫

はやし

こまお

京都市上京区中長者町通室町西入

人形作家・林駒夫氏。一見野武士のような風貌から、どうしてこうも繊細な人形が生まれるのか。薄暗い仕事場に桐材を刻むノミの音が静かに流れ、やがて、出来上がった原形は胡桐塑によって成形されて行く。人形師は題材にみちびかれ、また、材料と対話をする。それは愛しきものとの会話に等しい。その語らいの中で一本の桐材が美しい人形へと変身して行く。そこには時の流れが静止し、何時しか夜が更けてゆき、杜鵑ほととぎすがひときわ鋭く夜空を震わせて渡って行く。仕上がる作品に作家の心が通い、新しい生命いのちが誕生する。京の町に夜明けを告げる鐘の音が響き渡る。

昭和十一年、下長者町通新町東入るの旧家の末っ子として生まれた先生は、幼い頃から節句や雛人形に心をうばわれる。そのためか、十九歳のとき、京人形司十三世・面屋庄三氏の門を叩いた。また、能面を北沢如意氏に学ぶ。以来、三十数年、この道一筋に歩み続け、数多くの「愛しき者」を生み出してこられた。その作品は古典に根付いている。「能、狂言や舞楽の世界に題材を求めながら、やはり心の中では雛や節句の人形がよみがえってきます」と語る先生のまなざし

は、あの制作のときの鋭さから一変して、幼かった頃を懐かしむかのようにやわらかな光をたたえていた。



上京の史蹟

その二

上京の歴史的推移

中世(その二)

嘉吉三年(一四四三)七月、足利義政が僅か九歳にして八代將軍になりました。この頃、永享の乱、嘉吉の乱などがあり、幕府の政治は乱れに乱れていました。当然九歳の將軍にはこれを立て直す力などなく、その実権は細川、

山名、畠山、斯波などの巨頭が握り、彼は只の傀儡にしか過ぎなかったのです。長祿三年(一四五九)は新春から天候異変が続き、九月十日にいたって山城、大和地方に大暴風雨が襲来、大きな被害をもたらしました。京都では鴨川が大氾濫を起こし、無数の溺死者が出たのです。それに加え、米の価格は高騰し、各所で徳政を求める一揆が激発しました。氾濫の後には飢饉が訪



室町幕府「花の御所」址
室町通今出川角

れました。洛中の餓死者八万余人と言われ、都はまさに屍臭たちこめる一大葬地と化したのです。しかし、幕府はこうした災害に何一つ手を打とうともせず室町花の御所の復旧工事に没頭していたのです。しかもその最中、將軍家では相続問題が起こり内紛が続いていました。義政は九歳で將軍職を継いだため、政治はすべて細川、山名、畠山の各大名に任せ切りでありました。それ故、年を取ってからも政治に関する意欲や関心はまるまるとなく、祖父義満を真似て風流に生きることをのみ考え、早く將軍の地位を他に譲り楽隠居することを考えていたようです。將軍義政とその正室日野富子との間には一男二女がありましたが、この嫡子が幼くして死んだため、もはや後継ぎの男子の出生を諦めておりました。そこで彼は弟の浄土寺門跡であった義尋を無理に還俗させ義視として次期將軍職を約束し、その後見に細川勝元を据えたのです。しかし、これは大変な誤算でありました。その翌年、日野富子は男子を出生したのです。富子との間に実子の義尚が生まれたため情勢は一変します。富子は、山名宗全を後見としたので、ここに二大勢力である細川、山名の両派が対立し、幕府を二分して争う結果

となったのです。その上、管領の一人である畠山家でも相続問題が起こり、本家筋である畠山義就は山名に、養子である畠山政長が細川を頼ったため、益々問題は大きく発展し、飢饉と悪政が渦巻く中、二大陣営の険悪な空気は次第に大乱へ進んで行きました。
応仁元年(一四六七)正月五日、かつて將軍の勘氣に触れ河内国へ帰っていた畠山義就が、山名宗全の計らいで帰参がかなったのを祝し、將軍義政、義視を迎えて山名邸にて盛大な祝宴が催されました。しかし、これはあくまでも表面的なもので、その真相は山名

イタリアが好き!
イタリア料理専門店

レストラン

フクムラ

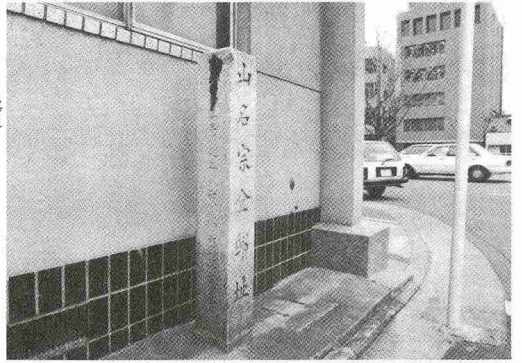
河原町店 中・六角河原町東入 255-5733(火・休)
四條店 中・富小路四條上ル 255-2060(水・休)
㈱イタシヨク(イタリアワイン・食品輸入元)(小売歓迎)
北・紫野大徳寺門前町 491-0900

宗全のクーデター計画であったのです。この計画によって祝宴の二日後、畠山政長は管領職を罷免され、予てから山名の支援を受けていた斯波義廉が新管領となりました。その結果、細川方に組みしていた政長は失脚してしまいます。面目を失った政長は、自分の邸宅に火を放ち上御霊神社の森に陣を敷き立て籠ったのです。しかし、政長の將兵たちの中にはこの挙を危ぶみ、逃亡する者しきりで、手勢は僅かに二千を数えるのみであった、と伝えられております。

かくして、応仁元年正月十八日早朝、応仁の大乱の緒戦の火蓋は切って落とされました。この日は払暁より烈風が



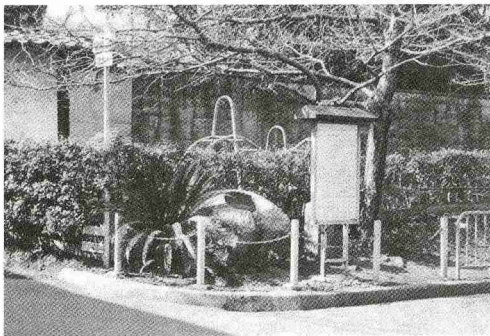
「応仁の乱」勃発の地、上御霊神社



山名宗全邸址
堀川通上立売下路西入山名町

吹き荒び霰交じりの氷雨が頬を打ち、あたかもこの戦いの前途を示すがごとく悪天候でありました。こうした中を、畠山義就は手勢を率い御霊社の政長陣を奇襲したのです。この猛攻によって社殿や周囲の建物は火に覆われ、阿鼻叫喚の巷と化し、政長軍は散々に敗北し猛火に追われるように細川邸へと逃れました。しかし、この戦いは將軍の敵命もあって、細川、山名の両軍が動かなかったため、さほど大きな被害は出ませんでした。

この戦いが導火線となって、やがて細川勝元を将とする東軍と山名宗全率いる西軍との対立に発展し、応仁の乱となり以後十一年に及ぶ内戦が京都の



百々橋址
寺之内通小川角

町で繰り広げられたのです。この大乱で京の都はことごとく焼き尽くされ、一面の焼野ヶ原になってしまいます。東軍細川勢は花の御所を拠点とし、西軍山名方は宗全邸を本陣としたためその中間に位置する小川一帯は激しい戦火を被りました。特に小川寺之内に架かる百々橋は当初から激戦場となり、この橋をめぐる攻防は凄まじいものでありました。また、実相院も戦略的見地から重要な場所であつたらしく、これも激しい争奪の的となつたようです。当時の文献には「実相院城」と記されるところよく要害化されたものであつたようで、これは山名邸でも同様「山名城」と呼ばれ周囲に堀を巡らした要害でも

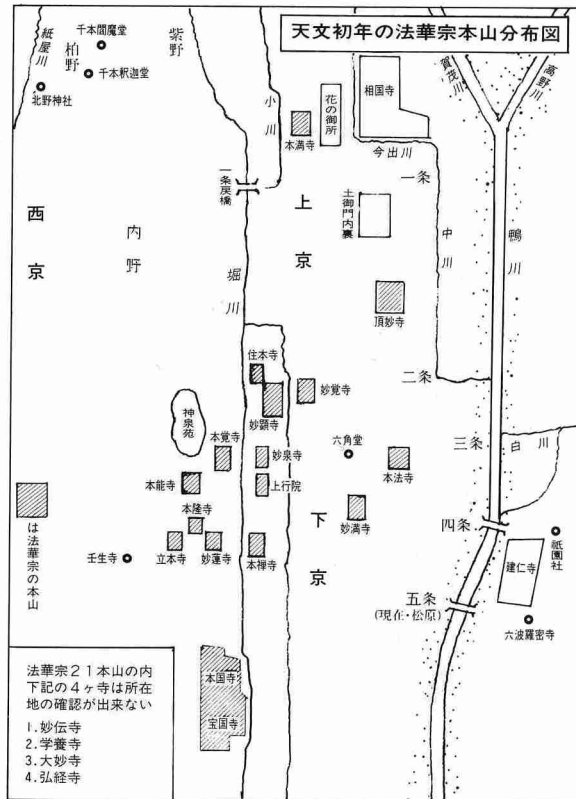
ありました。内乱は武家間のものだけではなく、その戦火は民家や社寺に多大の被害を及ぼし、人々はこれから生命財産を守るため様々な自衛の手段を取りました。例えば、「構」や「堀」などの防御施設が造られたようで、上京区の構は、実相院構、白雲構、柳原構、讃州構、御所東構、山名構、伏見殿構、北小路構、武衛構、御霊構などが諸文献に記されています。これらを見ますと、武家の要害的なものと公家や庶民の自衛的なものとに大別できます。このように上京の随所に戦乱に備えた構や堀があり、あたかも上京はその全域が要害化された都市景観を呈していたと思われれます。そしてこの景観は応仁の乱から戦国時代にまで続いていたのでしよう。

戦乱に明け暮れた中世の上京に、文化に少なからず貢献した人々が集住しておりました。彼等は柳原散所、北畠散所、桜町声聞師、川崎庭者、大黒声聞師、御霊社東西散所、御所東声聞師などと呼ばれる集団で、公武貴紳の雑役をしながら当時の芸能界や文化に多大の足跡を残したのです。新年を寿ぐ宮中での千秋万歳を演じたのは、大黒

声聞師や北畠の散所でありました。後には柳原散所も加わり、交互に宮中に伺候して千秋万歳を催したのです。また、川崎庭者は作庭に従事し、禁中や山科家にしばしば出入りをしたと伝えられております。

戦国騒乱を経た上京区は、ここに新たな展開を迎えます。戦乱の最中、堺や奈良、あるいは近江へと避難していた大舎人の織手が西軍の陣地があった西陣地区に続々と帰り、再び座の復活に努め、やがて西陣の機業地へと発展して行くのであります。それと同時に町家も以前のごとくに復興していたらしく、明応九年（一五〇〇）七月二十七日の火災で上京の人家二万数千軒が焼失したという記録からもその復興ぶりが伺えます。

しかし、天文五年（一五三六）にいわれる「天文法華の乱」が勃発し、上京区は再び大きな打撃を被ります。これは比叡山延暦寺によって当時急速に発展しつつあった法華宗への弾圧でありました。当時、延暦寺を頂点とする旧仏教系大寺院は、それぞれの持つ荘園領からの年貢によって経営されていたのに対し、新興の法華宗は後藤、本阿弥、茶屋、野本などの有力町衆を中



心とした庶民の檀家によって運営されていきました。しかもその数は夥しく、

灰燼に帰したのです。

京洛の町々は法華題目に溢れていたといえます。特に、富裕な西陣の新在家の人々はそのほとんどが法華宗に帰依しており、これをそのまま放置することは天台の座を始めとする旧仏教系の各宗派を脅かすことになったのです。延暦寺の弾圧が強まるに従い彼等は町に堀や柵を設け、法華寺院に立て籠もり延暦寺の攻撃に備えました。こうなりますと、これは単に延暦寺と法華寺院の対立だけではなく、互いに宗派を上げての宗教戦争へと、発展しました。新興勢力である法華宗徒の抵抗は鋭く、そのため法華宗徒の多くがこの戦いで戦死し、上京区もまたその三分の一が

しかしながら乱後の復興は以外に早く、その後数年にして室町上立売に

「立売りの町」が形成され、西北部の北野社を中心とした商業地区同様、目覚ましい発展を遂げるのです。当時の室町上立売付近には幕府の制札揭示場が置かれていた関係上、大変な賑わいを見せていました。京都が大消費都市に成長すればするほど、地方からの物資に依存する度合いが高まり、諸国から多くの商人が群れをなして流れ込み、商業活動を活発に展開したようです。それ故、ここを中心として上京区東北部が急速に発展したのは至極当然の結果であったといえましよう。それと同時に町衆による娯楽も現れてきます。

豆政

本店/〒604 京都市中京区夷川通堺町東
TEL.075(211)5211~3

三条店/〒604 京都市中京区三条通河原町東
TEL.075(255)0390

文亀（一五〇二）から天正（一五七七）にかけて、京都の町に「風流踊り」が流行し、盆の行事を彩ります。この風流踊りは怨霊や疫神、あるいは祖先の霊を鎮めるため華麗な装束を身に纏った練り衆が囃子を賑やかに奏しながら踊り歩くものでありました。一般庶民には娯楽の少なかつた当時、こうした催しが流行したのは至極当然ではあります。為政者にとっては決して歓迎すべきものではなく、永正三年（一五〇六）、細川政元によって停止の令が出されたほどでした。しかし、その後の隆盛から見ても明らかのように、す



風流踊図

でに町衆の力が幕府の権力を上回って
いたことを示しております。文献によ
りますと上京区では上京日々風流、武
者小路風流、室町衆風流、立売町踊、
六町衆躍、一条室町踊、上京中躍など
が記され、盛んであったことが伺えま
す。また、町々では盆の万灯会が出さ
れ賑わったことも確かであります。こ
うして盆の行事が人々に数少ない娯楽
を提供したのですが、一方、半職業的
な手猿楽師も上京の中から生み出され
ておりました。彼は上京室町の住人で、
渋谷大夫と呼ばれ、後には一座を組織
し九州日向地方にまで巡業し活躍した
のですから、単に手猿楽といっても中々



西陣の家並

のものであったといえます。
このように応仁の乱以後、上京は再
度の災害に見舞われながらも急速に復
興を遂げるのですが、永禄十一年（一
五六八）九月、織田信長の上洛によっ
てまたもや大きな打撃を被ります。当
時の上京は、もちろん日本の中心地で
あり、国内で用いられる絹製品のほと
んどを西陣が生産し、最も富貴な人々
の居住地とされていきました。これを信
長が見落とすはずがありません。彼は、
上洛の翌年、室町勘解由小路（現在の
室町下立売付近）に將軍義昭のために
新たな邸宅を造営することに着手し、

この協力を上京に課したのです。この
新第は驚異的な速さで建築が進められ、
僅かに七十日にして完成を見ます。し
かもこれは足利義輝の古城を再現した
もので、武家御城、武家御所、あるい
は公方之御城などと呼ばれる壮大なも
のであります。
次に信長が放った第二弾は、上京に
在住する富豪に対しての「唐物名物」
の強制買い上げでありました。彼は新
在家に住む豪商の池上如慶や江村氏、
あるいは大文字屋、祐乗坊、また、法
王寺、佐野氏などから天下の名品を強
制的に出させ、専制君主のイメージを
植え付けたのです。しかし、富裕を自
認する上京衆は明らかなる反信長行動
を持ってこれに対抗します。この行動
に激怒した信長は、將軍義昭との間に
不和が生じたのを理由に、京中焼打ち
という威嚇に出たのであります。元
龜四年（一五七三）四月、この噂を知っ
た上京、下京の住民は信長に銀を贈り
焼打ちを逃れようと努めますが、上京
のみは聞き入れられず、焼失家屋六、
七千軒という大打撃を被るのです。こ
の状況については、当時信長の側近く
にいた耶蘇会の宣教師ルイス・フロイ
スの人は富み且つ傲慢なるが故に、条

件を良くしてかえって信長の不快を招
き、更に建築に着手せる宮殿の周壁を
破壊したることにより、その怒りに触
れたり。（中略）上の都の人々は猷納
したる銀千三百枚に少しも頓着せざる
を見て、彼らは傲慢なりしが故に心中
これを憤りたり。云々とあります。
これはまさに、富裕なるが故に自らの
力を過信した上京衆の敗北でありまし
た。しかし、信長は同年七月、焼打ち
を行なった上京に対し、ただちに復興
するよう復興命令を出しておりますが、
この再建にはなお数年を費やすることに
なります。（以下次号に掲載）

リプトンの新しいお店が白川通りに誕生しました。

リプトン 北白川店

営業時間 朝10時～夜11時

左京区白川通り一乗寺下ル
電話 (075) 722-7961

跡から金箔瓦
聚楽第東堀川



豊臣秀吉が十六世紀末に築いた聚楽第（じゅらくだい）の跡から金箔瓦が続々と発見されました。その数六百点以上、上京区内での思わぬ発見に大きな話題となっています。さる二月七日、中立売大宮角の発見地で、京都府埋蔵文化財調査研究センターによって現地説明会が行なわれました。その時に聞いた説明を上京区民の皆さんにもお伝えします。

調査地点は京都西陣公共職業安定所の改築予定地で、平安宮北東部の内教坊と平安宮の東を限る築地および大宮大路の推定地にあたる場所です。また、この位置は桃山時代の聚楽第の一部と推定されるところですが、その規模に関しても諸説があつてはつきりしていません。その範囲は、北は一条、南は二条、東は堀川、西は千本とする説、北は一条、南は丸太町、東は大宮、西は千本とする説など、これまでからも発掘による位置の確定に期待がかけられていました。

聚楽第は、関白の公邸として秀吉が築いた城郭式の住宅で、わずか九年半程で豪華な姿を消したのです。それだけに謎も多く、後世に描かれた洛中洛外図や聚楽行幸図の屏風絵などで知られるだけです。

聚楽第が着工されたのは天正十四年（一五八六）の二月で、まず堀や石垣の普請が始まり、六月には天守と御殿、

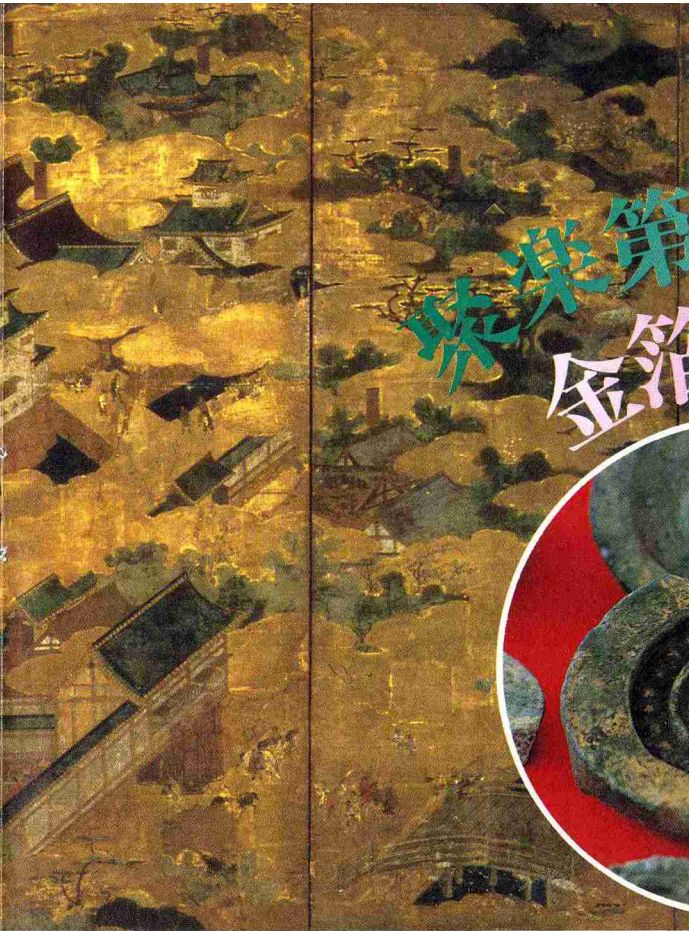
八月には大名屋敷の作業、翌十五年一月には作庭と順調に進み、二月七日には公家や、武家が年始の礼に来ていますから、かなり工事が完成していたのでしょう。九月十三日、秀吉は正式に大坂城から移り、天正十六年四月十四日には、秀吉の権力を誇示するために後陽成天皇の行幸を仰ぎます。

当時、日本に滞在していたポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは、秀吉とも親交があり、聚楽第へもしばしば訪れたと思われ、その著『フロイス日本史』にも「彼（秀吉）は同じ都の市内の内裏（の宮殿）に近いところに、自らの城と宮殿を築かせた。それらは、かつて信長が安土山で造ったものや、数年前に彼が大坂で築いたものよりも、はるかに豪華であり、規模においても卓越していた。」と書き残しています。

天正十九年十二月、秀吉は関白の職と聚楽第を甥の秀次に譲って太閤となります。しかし、文禄四年（一五九五）七月には謀反の疑いで秀次が高野山に追われて自刃させられるところとなり、直ちに秀吉の命で聚楽第は完全に取り壊されることとなります。

以来四百年近く、平成の世になって、そのごく一部ながら陽の目を見ること

▲「聚楽第図屏風」（三井文庫蔵）





になりました。幻の城ともいえる聚楽第の上に生活している上京区民には、不明であった歴史を知るきっかけとなることでしょう。

この調査地域は約四百平方メートル、掘り下げられた地表下八十センチ位までは近現代の盛土で、その下には二十〜六十センチの灰黄色礫混じりの粘土層があつて、江戸時代の地層が存在します。そのあたりには新しい遺構が認められますが、その北側に人為的に埋められた大きな堀が発見されました。この堀には、西から東下がり埋められた土の層が、現地表面下五・三メートルの平坦面まで重なりあつています。

その土の中から見付かったのが、多数の金箔瓦なのでした。しかし、すべて完形品はなく、文禄四年の聚楽第破却により不用になった瓦を東の堀へ埋め込んだものと推定されます。中でも金箔瓦は六百点を数え、一カ所から発見された数としては、これまでの最高で、ほかには大坂城や安土城、伏見城などで出土しています。金箔瓦は金箔を漆で瓦に貼りつけたもので、下から見上げた時に見える垂直面を主としています。軒平瓦や軒丸瓦の瓦当の外縁部と文様の突出部に多く見られ、ほか

に鬘斗瓦や各種の飾瓦にも貼られています。

その他の遺物としては、わずかに瀬戸・美濃窯系の天目茶碗、中国製の青磁碗、丹波焼き・信楽焼きのすり鉢、土師器皿などが見られるだけで、これも瓦といっしょに捨てられたものでしょう。

今回の調査で明らかになったのは、この遺構が聚楽第の東堀で、確認された幅十五メートルの倍以上あったと思われる点です。堀の肩や石垣は検出されませんが、年代の確かさから基準となる金箔瓦の発見とともに、今後の聚楽第研究の大きな手がかりになるものと思われれます。

なお、聚楽第破却後も、この土地は堀跡が示すように湿地状で、江戸時代にもあまり利用されていなかったようです。また、平安京の遺構は、この堀によって完全に削られており、痕跡も発見されませんでした。

聚楽第の址には上京区の中心部ともいふべき地域が重なっております。その遺構はまだまだこれから明らかになると思われます。私たちの身近な遺跡となった聚楽第を上京区民として見守っていききたいものです。

(出雲路敬直)



平成三年度 上京女性学級

文化に学ぶ上京の再発見

上京区地域女性連合会

「伝統と文化の町」と形容されるように上京区は、歴史と伝統を受け継いで今日まで来ました。そこで、私達は、伝統文化や地域に因んだ伝統などを掘り起こして、歴史に学びながら、上京の再発見をしようと継続的に講座を開いています。今年は、武者小路千家の宗匠にお話を聞きました。

宗匠のお話から千利休が、秀吉に従い聚楽第に出仕するため居を構えられた上京の寓居は、御所を中心に、公家、高級武士の邸宅が散在する静かな所で、小川の上流には人家も少なく、今でも地下水を使って豆腐や湯葉を作っている店も有るくらい名水の出る恵まれた地域であり、茶の湯にとって最適の環境であったとお聞きました。

京の中心地として往時の上京は、御

所や公家、武家、寺院などの文化圏と、それを取り巻く商人や手工業を中心とする職人が交じり合って町を形成する生活圏が、それぞれ地域の特性を生かしながら共存し、有形無形の文化を築いてきました。そうした文化の情報発信地としての恵まれた知的環境が美意識を育て、独自の町人文化となって華を開かせ西陣織を世界に誇る伝統産業に育て、また京都の食文化を育んだのではないのでしょうか。

幸いなことに上京は、何処を尋ねても史蹟があり町名や地名に残っているような歴史があります。私達は女の目を通してそうした上京を見直し、町の文化や歴史を縦糸に、人と暮らしの絡み合いを横糸として、先人に学んで町づくりに参加したいと思っています。

文化遺産の伝承

女性学級が開設されましたのは、昭和三十二年からです。各種各様多岐にわたるテーマをもとに、学習と実践を重ねて参りました。

上京区におきましては、必ず文化についての学習と探訪を組み込んで参りました。武者小路千家の千宗守様、千澄子様をはじめ、能楽の河村禎二氏、和歌の冷泉貴実子様等々上京にお住まいの方々がお出ましく下さり、実り多い学習を積み重ねてまいりました。

昔から「田舎の勉学より京の昼寝」という言葉がありますように、京の町衆は文化意識が高く、水と緑に恵まれた環境の中から不滅の文化を培い伝承してこられました。学べば学ぶほど、その重大さを痛感し、その努力の並や大抵でなかったことを知りました。

現代の環境変化は激しく、情報過多は高度化し、国際化の一般化を要求されることを考えますと、今後の文化遺産の伝承はこれまでにない努力と精進が求められることでしょう。

文化の宝庫である上京に住む私たちは、一層学習を深め、まちの文化を守り伝承してゆく使命に燃えたいものです。

(北村広子)

古文化財にふれる

千宗守・談

建都一二〇〇年をむかえるにあたり、我が国の伝統文化の発祥の地である上京区は豊かな自然環境、そして歴史的、文化的環境にめぐまれている。他の地に住む人にくらべると自然と耳学問的に入ってくるので積極的な勉強がおろそかになりがちである。だから昼寝からさめても文化財や遺産を守って行かなければいけない使命があり、再発見の時期にきている。

この上京の地域は茶の湯の家元、三千家がある。それは当時、茶の湯にかかすことのできない水、水質がよかつたからこの地に茶の湯が栄えた。茶の

湯にはお茶が重要な役割を果たしている。日本に伝えられているお茶は約八〇〇年前、遣唐使によるもので遣唐船が派遣され、空海、最澄や使節たちによつてお茶の風習が我が国に伝えられたという。のちに榮西禪師により抹茶が普及された。

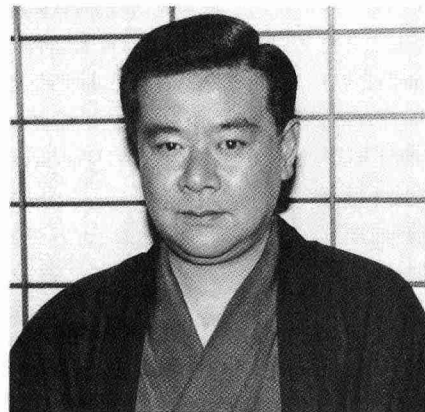
お茶に含まれているカフェインが覚醒効果をもっているので、禪宗の僧侶が座禅をする時に非常によい効果をもたらしていたとの事。僧侶とお茶は当時としては切りはなすことができないものであった。お茶の効果はすばらしいものがある。このように榮西禪師が

抹茶の最初のいしずえを築いた。

茶の湯と言えば千利休、利休は堺に生まれた。堺は当時、明との貿易の港として栄え、商人の町で鉄砲の取引が盛んに行われ、新興都市で繁栄していた。利休は若い頃に武野紹鷗に入門し、以後、堺の町人はじめ禪宗の僧侶、武士との親交があった。

今、テレビで放映されている信長、この信長の上洛の際には茶会がひらかれ、必ず堺の商人が招かれていた。それは経済的、政治的役割をもっていた。茶室という小間を利用してお茶を媒介に誰れにも聞かれることのない場所である。政商が行われていたのである。当時、堺の商人は海外貿易などで経済的に豊かであった。現在、政界、財界の人達が料亭において話し合いをする習慣があるがこれも当時のなごりであるかもしれない。

このことは信長亡きあと、そのまま秀吉に引きつがれるのである。秀吉にはことのほか利休の存在が高まり、秀吉と利休は接近していった。信長の時代は同等の位置であったのが、だんだん秀吉の地位の上昇にともない上下の

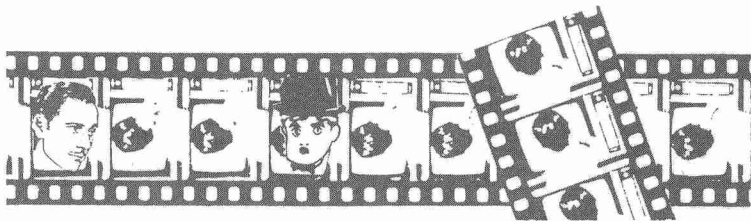


関係ができてしまふ、利休は余りにも秀吉との間柄が接近しすぎて秘密を知りすぎたために色々と取りざたされて、蟄居の身となりやがて殺されてしまふ。利休は信長、秀吉との出会いが政治的、経済的、お茶人といういくつかの面を持ち合わせていた。そして今日、京都の地において茶の湯が連綿として続けられていることは市民にとつて誇るべきことである。

秀吉ゆかりの北野天満宮献茶会が四〇〇年来続けられていることはよろこばしいことである。

利休は茶会を通して人と人とのふれあい、お互いの知識やセンスを磨くことができたのである。これは現在の我々も学ぶべきことである。





思い出の西陣映画館

その一



大野座―千本の芝居―千本座―千本日活

(上京区千本通一条上ル東側)

明治三十四年九月、尾上松之助一座にて開場、大正元年九月電気映画館を合併して日活映画常設館となる。大正八・九年頃は目玉の松ちゃんの全盛期で、当時子供入場料は五銭、昭和二十八年に千本日活と改称、その後閉館し、現在関西西友千本店。
長久亭―長久座

(上京区千本通一条下ル東側)

明治四十四年十一月新築落成、七十坪、定員二一八名、昭和十一年に松竹の経営、松竹映画・洋画の二番館、昭和十二年ニュース映画に転向、昭和十五年大都・全勝映画、昭和三十三年新東宝封切り館、その後閉館、現在千杉会館。

西陣キネマ

(千本通中立売上ル東入北側)

テレビ、ビデオ等の映像文化の勢いに押され、映画界の後退が叫ばれて久しい。西陣の発展と共に栄え、西陣の衰退と共にその灯を一つずつ消していった京都で、新京極について映画館、寄席の多かった西陣の興行街のうつりかわりに想いを馳せるのも一興かとも思われませぬ。史跡にはありませんが、さしづめ史席と呼んだ方が良いのかも知れませぬ。

娯楽は映画だけやった

嘉楽学区

鹿野幸作氏(76歳談)



わしらの若い頃の、昭和十年以前の話やけど、西陣の織物業界は栄えていて、その頃の若い者は、今のようにはパチンコもないし、娯楽としてスポーツをする訳でもなかった。

娯楽といえは、映画を見に行くしかなかったものだ。道の辻々には、映画館の看板が出ていて、チンドン屋もいた。

映画館は、大人三十五銭、小人十銭か十五銭くらいで、そのほかに今と違って大人と子供の間に、中人二十銭というのがあった。

中人は、ほとんどが、丁稚、織り手はんなどの奉公人の客だった。その中でもちよっと大きい人は、「あんた大

人やで」と言われたけれど、「いや、こないだは中人やったで」ということで、中人にしてもろてたもんなや。

客席は、男と女の仕分けがしてあり、男と女の席の真ん中に同伴席があった。同伴席は、夫婦が利用し、若い二人のカップルはなかった。ときどき男が女の席に座ろうとすると、警官がいて怒られたものだ。それほど、風紀がきびしかった。

映画は、ほとんどが連続もので、次の週に続きが上映された。映画館に行きかけると毎週行かなんたら、さびしい感じがしたものだ。毎月一日と十五日の休みの日には、二、三軒映画館をまわり、一日中観て歩いたものだ。

弁士は、薄暗い電灯の光で本を見ながら、語ってくれたし、アコーディオン、バイオリンなどの楽団も5、6人いて、映画にあわせて演奏してくれたものだ。映写機も今のような電気ではなく、アーク灯であった。そのため映写室はすごく暑かったことを覚えている。

今は西陣業界もこんな状態で、パチンコ、カラオケが多すぎ、時代も変わったものだと、つくづく感じるこの頃です。

西陣附近の映画館劇場略図



■ は平成2年1月現在上映している映画館

番町遊廓の組合事務所があったところに五番街東宝が開場、その後千本日活と改名し、現在上映中。

昭和館―西陣松竹―昭和館

(上京区千本通下長者町上ル東側)

昭和二年開館、昭和十二、三年頃松竹映画「愛染かつら」上映。女性客の紅涙をしぼり、連日満員、昭和三十三年松竹映画の封切館として、西陣松竹と改め、昭和十九年四月、非紅系一番館。当時、五日間の入場料は六七三円四九銭、昭和三十年頃には平日でも定員(約五百名)は軽くオーバー、日曜祝日には定員の三、四倍も入る。佐田啓二、岸恵子主演映画には入口に百メートルほどの行列の盛況、昭和四十五年頃に閉館、現在ニッショウストア。

この稿は、京を語る会 田中泰彦氏の御厚意により、同氏著「西陣の史跡 思い出の西陣映画館」(三星社刊)から筆者が一部引用させていただきました。(三島利則)

た頃が最高の入り、現在パチンコ店。

千中劇場

(上京区中立売通千本東上ル)

朝日座 (明治四十三年八月開場)―

京山亭 (昭和十二年寄席) 千中劇場

(昭和三十三年には洋画の二番館)―

千中ミュージック、昭和六十二年六月

十一日焼失。

西陣大映

(上京区千本中立売上ル東入北側)

福の家 (明治四十四年・昭和十二年

寄席)―帝国館 (昭和十五年十一月松

竹映画二番館)―国際キネマ―西陣京

宝―国際大映 (昭和三十三年八月大映

映画封切) 西陣大映と改称、西陣京極

唯一の映画館として上映中。

西陣東映

(上京区浄福寺通西筋一条下ル東側)

京極座 (明治四十三年二月開場・昭

和十二年芝居) 西陣ニュース映画館―

新興映画劇場 (昭和十三年七月三十一

日、新興映画の封切)―西陣東映―東

洋映画劇場―西陣東映、昭和三十五年

六月全国六十五番目の東映直営劇場と

して出発、当日黒川弥太郎・雪代敬子

の挨拶でにぎわったが、興行不振のた

め昭和四十六年八月二十日閉館、現在

飲食店街。

五番街東映―千本日活

(上京区上長者町通千本西入西側)

昭和三十二年に、水上勉原作、佐久

間良子主演「五番町夕霧楼」、今井監

督、「真昼の暗黒」で有名になった五



中立学区に居住していた

桔梗屋甚三郎の話

西鶴の「日本永代蔵」に載っている人で、
北野天満宮に常夜燈を寄進していた//

昨年十一月二十四日開催の「ふれあ
い史蹟ウォーキング」の時ですが、北
野天満宮の宮司、浅井與四郎さんより
井原西鶴の『日本永代蔵』に載る桔梗
屋甚三郎寄進の燈籠が天満宮の楼門前
にあるとのお話を聞き、甚三郎は、以
前より私の住む中立学区に居住してい
たことを知っていました。そこで、早
速、青銅の常夜燈の銘を読んでみます
と「奉寄進、金燈籠一雙、永代常夜燈、
延宝五年（一六七七）七月吉祥日、願
主佐々木氏桔梗屋甚三郎敬白、三条釜
座住、近藤丹波掾、子久政作」等が記
るされていました。ある古書に「洛中

洛外の神社佛閣に、大阪北浜桑名屋仁
兵衛、京かまの座き、やう屋甚三郎が
常夜燈を寄進せざる所なし」といわれ
たが、女敵討に逢うて斬殺されたこと記
るされ、又延宝九年、死亡との事です
ので、なるほどなと思われ、又製作者
の項の近藤丹波は、郷土史の『京羽二
重』（貞享二年・一六八五刊）に「鑄師、
三条通釜ノ座、近藤丹波と記載されて
います。なお常夜燈の下の石の台を見
ますと、中立学区に居住されいた山中
又六さん（先祖は江戸末期の町代）、
堂本伍兵衛さん（故堂本印象画伯の父）、
吉川猪之助さん（現聚楽会館の建物の



桔梗屋甚三郎寄進の燈籠

旧所有者）の名も記載されていますの
で、今の場所に常夜燈が設置されたの
は大正頃と思われまます。

さて日本で初めての町人物草紙とし
て知られる『日本永代蔵』第四巻に
「祈るしるしの神の折敷、京にかくれ
なき桔梗屋、わら人形の夢物がたり」
とあり、貧乏神（わら人形）に御饌を
供えて祈った甲斐あって、富貴になっ
た桔梗屋甚三郎のこと、又桔梗屋は紅
染屋で、もと桔梗染（桔梗色の染）を
専業としていたが、中紅染を仕出し財
をなした事が語られています。物語の
中の一、二の内容にふれてみますと、
「鋸商（のこぎりあきない）にして十
年たたぬうちに千貫目余の分限（金持
となりぬ）」とのべられています。皆さ
んは鋸商という言葉をご存じでしょ
うか、鋸商とは、行きにも帰りにも油断
なく商売すること、転じて両方の相手
から利を得る事とのことだそうです。
又「小紅屋という人、大分仕込して」
とも記るされていますので、小紅屋の
ことについて少しふれてみますと、
『京雀跡追』（延宝六年刊）に「烏丸通
廬庵町、典薬のかみ、ろあん法師、此
町の家（烏丸通上長者町西北角）にあ
り、もみべにそめや、小紅や和泉と云…」
とあり、『橋窓自語』（九）には「…小

永年の信用と実績
真心のこもったご奉仕

葬祭センター 株式会社

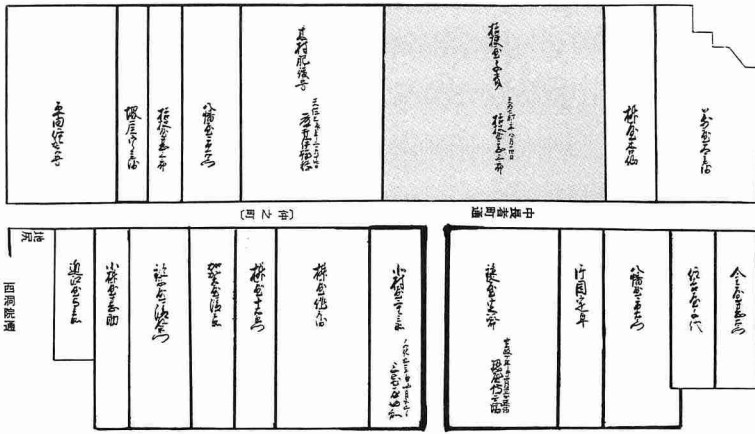
公益社

本社
烏丸三条下ル ☎(075)221-4116(代)

北公益社/京都市北区紫明通堀川東入
中公益社/京都市東山区五条通東大路東入
南公益社/宇治市横島町(文教短大前)
滋賀公益社/大津市朝日が丘一丁目

☎075(431)7121(代)
☎075(551)0042(代)
☎0774(20)0042(代)
☎0775(23)0042(代)

紅屋といふ家の井は名水にて、むかしひでのり比、この水を公家にめされしことあり、その時速水といふ称号を給はり世々つたえ称して、近世乱舞の小鼓者に、速水六兵衛といひし者、此家の人なりしが貧乏にくるしみて、小紅屋を人にゆずり相続させたりしより、小紅屋の名のみのこり、速水の号をう



仲之町別図 (安永頃 1775頃) (町内資料より作図)

しなひたり、をしむべきこと也。……と記るされています。その跡を寛保元年(一七四一)に買収したのが現大丸百貨店の祖、下村家で明治期まで下村紅店として、紅染工場を営み、現在も下村氏が居住され、今も先祖からの言い伝えにより当家が寺町通今出川下の清浄華院内の良樹院にある速水家の十三基のお墓をお守りされているとの事です。

『日本永代蔵』の、この項の終わりは「我が夫婦より働き出し、今七十五人の、寵將軍、大屋敷ねがひのま、に七つの内蔵、九の間の座敷、萬木千草の外、銀の生る名木、はびこりて、所はしかも長者町にすめり」と結んでいます。長者町は現在の中長者町通の新町、西洞院間の仲之町のこと、江戸時代末期より今も当町にお住みの倉田家保存の資料によれば、桔梗屋一族が延享元年(一七四四)より文政四年(一八二二)まで北側に居住していたことがわかります。なお元禄四年(一六九二)成立の『京都覚書』によれば隣接の「上長者町西洞院東へ入丁に甚三郎の一族と思われる筋目有町人・桔梗屋伊兵衛」の名が記るされ、大正四十年刊の『京都府誌』によれば「桔梗屋甚三郎ト云ヘル富商アリ。建都ノ時、

奈良ヨリ移住セル家ナリ、今其敗宅墟ニ、證文塚ト唱フル碑石存シ、面ニ佐々木有則ノ数字ヲ彫ル。蓋、何者ナルヲ詳ニセス。中長者町通ノ名、簡家ヨリ起ルト云。」とありますが今はその碑石はありません。余談になりますが、『日本永代蔵』の京の出版元は二条通越屋町、金屋長兵衛となつていますが、金屋長兵衛は寛永頃から正保頃までの間、仲之町辺の西洞院通長者町で書店を営業していたといわれています。

(高島茂夫) (参考文献) 日本古典文学大系、西鶴集下、岩波書店刊 等

編集後記

▽『上京 史蹟と文化』の第二号をお届けします。本誌は昨年度まで上京区文化振興会が発行し、町内回覧していました『上京の史蹟』を発展的に解消し、上京ふれあい事業の一つとして、年二回、上京区内全世帯に配布するものです。

▽上京区の特性を生かし、区内の史蹟と文化を啓蒙しようという主旨で編集しております。第三号は秋頃に発行の予定で準備をすすめていますので、御期待ください。(い)

これはどこでしよう？



○正解者の中から抽選にて二十名の方に記念品をお送りします。

○締切 平成四年 四月 三十日

○正解と住所・氏名・電話番号を記入の上

〒六〇二 京都市上京区今出川通室町西入 上京区役所区民相談室「上京・史蹟と文化」宛にハガキでお送り下さい。また本誌の読後感もお書き下さい。

—日本の行事 五節句 世界に伝える—

子どもたちのために。
いま、人形文化を地球サイズで考えたい。



元宮内庁京都事務所長 財団法人有職文化協会理事長 石川 忠

(五節供)

人日の節句	一月七日
上巳の節句	三月三日
端午の節句	五月五日
七夕の節句	七月七日
重陽の節句	九月九日



前京都国立博物館技官 大手前女子大学文学部教授 切畑 健

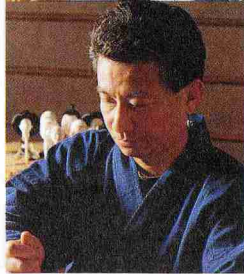
世界に翔く
正統の技を
守り伝え、
育くむ
有職司九人衆



有職司 井上 競



有職司 水谷秀夫



有職司 辻 健一



有職司 阪尾徹司



有職司 高橋勝俊



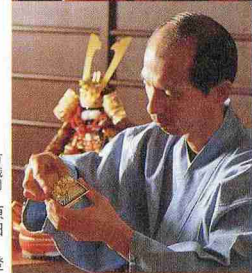
有職司 片岡正博



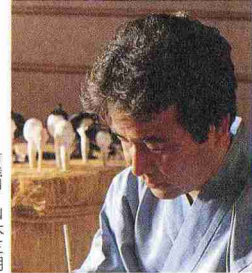
六世 島津豊泉



有職司 加藤清司



有職司 原田 登



有職司 山本正明

